
暇な魔王の一日

ziFuka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な魔王の一日

【Zマーク】

Z9968Z

【作者名】

z-iFuka

【あらすじ】

「はあ。なんでおまえらは弱えの？ つまんねえんだけど」

愚痴を言つ魔王の目の前にいるのはボロボロの勇者。テラスには4人の姫が観戦している。これは、暇な魔王のとある一日。

(前書き)

初投稿です。下手な所はこれから精進していきたいと思つていますので、よろしくお願ひします。

「んなこと言つたつて努力しねえんだり?」

「魔王様、きっと建前つてやつですよ」

「そうそう」

「口だけなのよ~」

「.....」

「皆さん言いたい放題ですね.....」

誰がどのセリフを言つているのか分かりますかね?

後で当てはめてみてください。当てはめた人は暇人です（笑）

とりあえず、始まりです。

「なんでおまえら“勇者”ってのは、弱つちこのに次から次へと来んのかね？」

そう言い放つ魔王。と、言つよりは魔王のよつた格好をした青年にしか見えない。

今、魔王は玉座に座つていた。

田の前にいるのは魔王を倒して世界を救つはずの勇者がボロボロになつてこちらを睨んでいる。

「おまえを倒せば、みんな幸せになるんだ……」このへりこで、負けてたまるかあ……！」

勇者が剣を構え、魔王に突きを放つ。

「へへへ。そうですか……」

それを指で軽くあしらつ魔王。

「へへへ……」のつ……せやつ……」

「ふああ～あ。遅つせ～なあ～

勇者の攻撃は魔王に何度もかわされる。

「そろそろさあ、諦めて出直したら？」

「仲間の犠牲は無駄にはしない！！」

勇者の仲間はうしろで倒れている。全員魔王にやられたのだ。

「天の神々よ、我に悪を討つ光の力を！」

勇者は魔法を唱え、剣を振り下ろす。

「ヘヴンホーリー！！」

天からふりそそぐ光が槍となり、魔王に向かう。

「闇よ、我が手に集い、光をかき消せ！」

魔王の右手に黒い闇が集まる。

「ライトイーター
光喰」

魔王の振るつた手から闇が飛び出し、天から降つてくる光を飲み込み、消す。

「なつーー！」

「だからさあ、仲間を連れて出直したら、そいつら寝てるだけだぜ？」

「なにっー？」

魔王の発言にビクッと一瞬動く仲間たち。やつ、魔王が氣絶させただけである。

「力の差を感じて嫌になつたんだろうなあー。でなきや田が覚めてんのに倒れたふりなんてしねえもんなー？」

「お、おまえら……」

涙を流す勇者。

それもそのはず。一人で必死に戦つていたのに仲間はその間倒れたふりをしていたのだ。

誰だつて泣きたくなる。

「ヒ、いうわけどつと帰れ。おーいバトラー、いるかあー？」

すると、一人の角の生えた青年が現れる。

「なんでしょうか？」

「こいつらを送り返せ。あ、あまり早く帰つて来なによくなるべく遠くに送れ

「わかりました」

「くそつ、まだ俺は諦めてなんかいなーつー。魔王、覚悟おつー！」

剣を構えて再び突撃してくる勇者。

「はあ。今度はもつと強くなつてから来いよな。相手したくな
いから」

やつ TTC 出す魔王。勇者の耳元で。

「……？」

こつのかまにか玉座から勇者のすぐ横にいた魔王が勇者の頭に手
を当てる一撃。

「おやすみ～」

「つー！？」

倒れる勇者。魔王の魔法によつて氣絶せられたのだ。

「それじゃあ、送つちやつて～」

「了解」

バトラー、と呼ばれた少年は魔法を唱える。

「彼らに駆ける足を授けたまえ。ミグレイド」

勇者たちの体が水色の光に包まれ、消える。

「よ～し。上出来だ。ちなみにビック送つたんだ？」

「あの勇者の故郷のミルト村です」

「……いいぞ。あそこなら戻つてくるまで数ヶ月はかかる。これでしばらくは安心だ」

「……毎度悪いのですがよろしいのですか？　あなたは仮にも魔王ですよ？」

そう、彼は魔王である。なのに今勇者を殺さず、故郷へ帰し、さらには勇者が来ない」とを喜んだ。

勇者が来ないことを喜ぶのはいいのだが、その理由が『つまりない』というからだめなのだ。

さらには彼、魔王なのに何もしない。世界は確かに征服しようとはしているが、そのために命令やら、国の王を殺したりとか、そういう事を一切しないのだ。

「だつて俺は親父から受け継いだだけじゃあねえか。勇者が襲つてくる理由も親父がさらつて来させたお姫様を救いに来てるだけだろ？　まあ、さつるのは違つたみたいだが」

「そうですが……」

「別にいいじゃねえか。親父も母上と魔界でバカنسを楽しんでいる事だしい？　それにくらべりゃあ勇者どもの相手をしてやつてんだからいいと思え」

「はあ……」

「やうこや、姫さん方は何してんだ？」

「あそこで勇者の鑑定をしますよ。なんでもどの子に救つて欲しいかを見定めているのです」

バトラーの指さした方向にはテラスのような所からひびきを見ている姫の格好をした4人の女がいた。

「ずいぶんと余裕だなあ。まあ連れ去られてから数年もたちやあそうなるか」

「逆に私は困りますがね」

連れ去られたお姫様たちは親父、今の魔王の父の時から特に牢獄へ監禁されたり、ひどいように扱われておらず、自由に生活していた。

脱走を試みる者もいたが、帰り方が分からず、結局帰つてくるのが大半だった。

「そんじやあ、お姫様たちにでも会いに行へかな」

魔王が帰ろうとしたとき、突然正面の大きな扉がバーンという音とともに勢いよく開かれる。

「魔王はどうだあーー！」

「またかよ……」

「頑張つてください。魔王様」

また現れた勇者に頭を抱えながらも、相手をする魔王であった。

「あの子はダメねえ～。『勇者』ってことよりも『蛮勇』って言った方が良くない？」

「そうだね～。武器もなんだかゴツい～」

「とにかくよりなんで斧なんて持つてるんでしょうか？」

「あれじやない？伝説の剣が見つからなかつたから一番強そうな武器を選んだのか、それとも単に好きなだけとか？」

「そうだったとしてもやっぱりダメねえ～。かすりもしてないじゃない」

「あの方のお仲間は何をしてるんでしょうか……？」

「見たところ、魔法の詠唱か、タイミングをつかがつてているのか

「……どちらにせよ、あれじや勝てない」

「別にあの子たちが負けてもいいんじゃない～？ 私たちももうなれたことだし」

「そりやうへ

「……

「みなさん、それでいいんでしょうか……」

勇者の品定めをしに来ていた四人の姫。全員あひこひの国から連れてこられたお姫様である。

唯一、丁寧な言葉遣いを残している姫、チル姫がそう言つて、
「だつて私何年目だと思つてんの？ むらわれてからもう四年は
経つてるよ？」

「私なんてもう四年目よ～？」

オレンジの髪の姫、アローネと大人の雰囲気をただよわせる姫、
ミリムが諦めたように答える。

「……私はまだ2ヶ月」

ぼそりと、すこしこの小さな声でしゃべる姫、ルナも後から答える。

「そ、そりなんですか……」

ちなみにチル姫は一番短くて、さらわれてからまだ一週間も経っていない。

今そこで戦っている？魔王がその座を彼の父、ヴォルザス・ド・ザインから受け継いだのは一週間前。

「ヴォルザスは息子、レオン・ド・ザインにむりやり魔王の座を渡し、人間の妻アリー・シャと一緒に魔界にバカンスへ出かけている。本当の名前は一人とも長いので省略。」

「ヴォルザス様は素敵なお方だつたわあ。連れ去られて何をされるか不安だつたけど、私を見て『おまえはもう自由だ。我が輩の城で好きに暮らすが良い。あの王にはもつたいたい逸品だ。』つて。レオン君とは大へ違ひ」

「本当だね。レオン君なんて平氣で『おまえら、いつまでいるんだよ?』なんて言ひしね」

「そうそう。器が小つちゃいくせにあれでも息子なのよね」

「いつたい何を親から受け継いだんだりつね?」

「……絶大なる魔力と最強の力?」

「そんなもん私たちには関係ないわよ。」 いまだつてその、 “絶大なる魔力” での蛮勇を弄んでるわよ?」

レオンは幻術で蛮勇と言われた勇者を虚めていた。

「あれだけの力があるのになんて世界征服! 魔界の王! 世界滅亡! ! とかやらないんだ?」

「本人曰く、『はあ? なんでそんなつまんねえようなことを俺がするんだよ』 だつてへ」

「それがつまらないことで助かりましたよ……」

「……私はやつてほしい」

恐ろしさにとを言つるナ姫。レオンの方はなにやら愚痴を言つてゐる。

「ああ～あ。また始まつたみたいねえ～」

「今日、何回田なの？ レオン君の愚痴浴びせ」

「たぶん12回田だとおもうわよ～？」

「よく愚痴が尽きないね～」

「浴びせられる相手の気持ちを考えて欲しいわね～」

「無理じゃない？ あの器のちひかやにレオン君だよ？」

「そうねえ～」

その間にもレオンは3人いた勇者の仲間に蹴りを加え、勇者には奪つた斧で殴つていた。

「ここまで聞こえてくるのはレオンの怒鳴り声と愚痴。例えば「弱いクセに来るんじゃねえ！」など。

「今度の勇者もこれで終わり、か～」

「あの方たちは大丈夫なんでしょうか？」

あつとこう間にレオンによつてボロボロにされた勇者改め蛮勇一行は近くにいた執事のバトラーにどこかへ魔法で送られていた。

もひるん行き先は遠い所である。

「愚痴言つくな殺さないのが不思議なのよね～」

「やうやう。馬鹿なんじや、つて、前から馬鹿だつたね～」

「何もない所で転んだり、魔法を暴発させて辺り一面焼け野原にしたり、ドジつ子だからねえ～」

「……ドジ」

「レオンさん、意外とかわいい所もあるんですね」

「……言いたい事は、それだけかな?」

『――――?』

いつのまにか四人の前に現れたレオン。足下には何もないのに浮いている。

背中には悪魔の羽が生え、顔が悪魔のよくなつていて。まさに魔王降臨である。

「俺のことを馬鹿にした、してしまつた、哀れな人は誰かな～?」

「あわわ、あわわわわわ」

「わっ、私は違うわよ！？」 そこには、チルちゃんがつ、か、勝手に「

「ええっ！？ 私は何も言つてませんよっ！？」 //コムさんとア

「一木さんか……」

「ちひ、違うわよー? 私に罪を着せないでーーー。」

「チルちゃんは嘘なんてつかないよねえ？」

「ひーーー！ つかまかんつあませんひーーー！ 嘘なんて言こまかん！」

魔王から発せられるものすゞい鬼気に震え、急いで返答するチル。魔王の後ろに何かが見える。

「だつてさ～？」
「うなんだい？」
「」のオレンジは分かつたけども～、君は、ど

魔王の今にも紅く光りそうな瞳がミリムに向けられる。

「誠に申し訳ありませんでした……！……謝ったから、いいわよね？ ね？」

「はつはつは。…………いいわけ、ねえだらうがああああああつ――！」

!

「た、退却つ！？ 戦闘離脱！？ とにかくやめて——！？」

そういうて逃げる//コムをじゅ黒いオーラを出しながら魔王が追いかける。

悲鳴を上げながら逃げる//ソムを猛スピードで魔王が追いかけていく。

「あわわわ……はつ！」

ミリムの悲鳴が遠くなつていつた時、アローネが我に返る。

「今、うちに私も逃げないと！」ミコム姉さん、あなたの分まで私が生きるよ！ わようなり！…」

アロー・ネが涙を流すフリをしながら魔王に向かつた方向と逆の方
向へ急いで逃げようとすると、

「逃げられるワケないでしょ～？」お嬢ちゃん？

「也幸運的遇到你了……」

いつの間にかアローネの背後に現れた魔王がいつもと違う口調で話しながらアローネを捕まえる。

「だったら牢獄にぶちここんでやるうかー？ 骸骨がたっくさんあ

「？」

もう死神にも見えてくるレオンに引きずられながら連れて行かるアローネ。

その惨劇を見ていた2人はといふと、

「…………」

「レオンさんは絶対に怒らせないよ！」
「……」

久しぶりに見る魔王の怒りモードに驚くルナと、絶対に嘘はつかないと心に決めたチルであった。

「……………あ。姫だ。姫がやれる。」

哀れな2人に裁きを下した後、レオンはまた玉座に座つていた。

「……」からでは見えないが、もつ夜だろう。たにまつに火がついている。

なぜ彼がまたここに座っているのか、それは、

「……」「が魔王の城か？」

「……弱そうだなあ。相手したくねえなあ」

また一人現れる勇者。期待を込めてここに座っているのだが、全然強い勇者はこない。

「おまえが魔王か？」

「……」「まで来て聞くか？ 知らないのなら帰つてもせうつても……」

レオンが話していると不意に飛んでくる一本のナイフ。

「なつー？」

レオンはそれを紙一重でかわす。……今のナイフに緑色の液体が

塗られてたのは気のせいだらうか？

「？ どうかしたのか？」

「ここにこしながらレオンを氣遣う勇者。その顔には道化師のよつな嘘くさい笑顔。

「今の、おまえが投げたのか？」

「？ なんの」とだ？」

「…………」

警戒するレオン。しかし勇者は笑顔をしわ一つ変えない。

「ヒーラーおまえは誰なんだ？」

「…………」

また飛んでくるナイフ。しかも今度は5本同時に飛んでくる。

「ふん」

警戒していたレオンが、いとも簡単にそれをかわす。ナイフが玉座の背もたれに刺さる。

「方向は？」いつからか……

「紅毛地獄の刃よ、かの場所に刻みし門より、あの者に死を『与え

たまえ」

「なに？ へそつ？」

「死刻ム爪」

刺さっていたナイフの先端をつないでできた五角形の穴から血のよじに赤い刃が飛び出す。

「ひつ。これもはずれたか！－」

「やつぱつおまえか！－」

勇者の顔は先程の笑顔が無く、悔しそうで垂んでいた。

「いまのが当たれば俺は魔王を倒した勇者だつたのこつー。くわ
つ！－！」

「あんな卑怯な真似をしてまで勇者になりたいのかよおまえは－
！－」

「ああやつわ。おまえを倒せりや、何をしたつていいんだよ－
！」

「なつ！－？」

「死ねよー。おまえはただの、俺が勇者として有名になるための
道具にすがねえんだよ－
！」

そうこうつてからナイフを構え、じりじりに向かつてくる勇者。

「誰が道具だつ！－！ 卑怯なガキめ！－！」

レオンは勇者の腕を掴み、投げ飛ばす。

「おめえみてえな奴を勇者になんてさせんかよ！－！」

「はつ。笑わせる。おまえに選ばれて勇者になるんじやねえ、お
まえを殺して勇者になるんだよ！－！」

「おまえなんぞ」殺されるかよ……。」

「我に全てを焼き尽くす闇の炎を」

「黒き雷よ、かの愚か者に裁きを下せ」

一人は魔法を唱える。

「ダークネスボルト……」

「滅びの火炎……」

レオンが少し早く唱え終わり、黒き雷と紫の炎がぶつかり合い、消滅する。

「……」れで終わりにしようぜえ…… 我は理性を捨て、狂氣の鬼と化す

「……まさか……？」

勇者が自分の血で魔法陣を描く。

「契約を捧げ、我に力を」

呪文を唱え終わり、勇者の体が赤く染まる。

「ひやはははは……死にな……！」

狂つたように笑いながら、赤い勇者はナイフを投げる。

۱۵۶

それを軽くかわすレオン。

「そ」までする意味があるのか！？ おいーー。」

「オラオラオラア、とつとと死ねや。ひやほほほ！」

ナイフを投げまくる勇者。

完全に狂二をまつたが、しかたねえ

勇者の背後に現れるレオン。その手には黒い、大きな鎌が握られていた。

「樂になれ」

サシヨツという嫌な音とともに「勇者が倒れる。

振り下ろされた鎌が勇者の左肩から腰を斬っていた。血が流れ出す。

もがき苦しむ勇者。

「おまえがそんなの使わなきや、助けてやつたのにな」

「地位やら呪声やら、そんなもんを欲しがる理由がまるで分からねえ。なぜそんなもののためにおまえは狂う？」

「うるせえええーー 道具の分際で、俺に意見するんじゃねえーーー！」

「あつや。救いようがねえな。てこいつかとつと死ね」

「つーー？」

声を発することが出来たのは、そこまで。なぜならレオンの鎌によつてただの肉塊にされたから。

「……」

広がる血の臭いと沈黙。

「……お姫様たちが見ていくくてよかつたぜ……」

「……」

「つたぐ、処理が、大変じゃねえか……」

「」の際、バトラーでも呼んで片付けさせよつか……」

「自分でやつた方が早いか」

そう言つと、レオンはそれを片づけ始めた。外には赤い月が不気味に輝いていた……

ある日、レオンはまた玉座にいた。

「おいバトラー、最近の人間どもの動きはどうなつてんだ?」

「また戦争をしていますよ。なんでもそれに巻き込まれた魔王もいるみたいですね」

「まだやつてんのかよ。なんなら、俺が介入してだな……」

「黙田です」

「うう。 いいじゃねえかよ別に」

「何度も言つよつですがあなたは魔王なんですよ。 この城にいでもらわないと困ります」

「なんだだよ。 勇者が来たら部下に戦わせつやーいじゃねえか。 なんならおまえが魔王になるか？」

「……その言葉を待っていましたよ」

「？ 今おまえ向て……」

「総員！ 配置につけ！ 今こそ下克上を果たすのだつ……」

バトラーのかけ声に城にいた部下が集まり、魔王に武器を向ける。

「まづはそいつを追い出せ……」

『おおーーーーーーーー』

そりには魔王に武器をじりじりと近づけていく。

「へえ～。 いい度胸じゃねえか。 一度城出行つてやるから、準備、 しとけよ？」

レオンが不敵な笑みをしてから扉へ向かう。

「やうやうだ。 そして次に俺がここに来る時は……」

扉を勢いよく開ける。

「……地獄にしてやるからな？」

ひいつ！

レオンの殺気に悲鳴を上げる部下たち。

た。
「にして、レオン元魔王は自分の城を笑いながら後にするのだ」

(後書き)

「おめでたばくしてみました。シリアルなところもありますが、どうでしたか？ 人気と氣分しだいではこの続きから連載していきたいなと思っています。」

「本当に人気なんて出んのかよ、こんな微妙な作品で」「本当に人気なんて出んのかよ、こんな微妙な作品で」「本当に人気なんて出んのかよ、こんな微妙な作品で」「本当に人気なんて出んのかよ、こんな微妙な作品で」

「私たちもちょっとしかでてないしさ～」

「そうそう～。しかも一日じゃないじゃん～」

「……」

「……」みんなみなさんですけど、よろしくお願ひします」

文才が凄く！自信無い……。

厳しい感想、お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9968n/>

暇な魔王の一日

2011年10月7日22時24分発行